

平成 23 年（2011 年）の平和宣言について

1 宣言作成の基本姿勢

- (1) 歴代市長の平和宣言を分析すると、概ね、平和への誓い、被爆の実相、核兵器廃絶に向けた訴え、被爆者援護施策充実の訴え、原爆犠牲者への哀悼の意、という 5 つの要素と、時代背景を踏まえた要素が盛り込まれている。

今年の平和宣言は、この 5 つの要素を引き続き盛り込むとともに、時代背景を踏まえ、3 月 11 日に発生した東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所事故に関する事項を盛り込んだ。

- (2) 被爆者の高齢化が進み体験を語れる方が少なくなる中、ヒロシマの原点である被爆体験や平和への思いを次世代、そして世界の人々に共有してもらうことが重要であることから、国内外で注目される平和宣言に被爆者自身の体験や平和への思いを盛り込み、広く伝えることとした。

- (3) 具体的には、公募により 73 点の被爆体験談を頂き、「被爆体験談選定委員会」での議論を踏まえ、2 点の被爆体験談を盛り込んだ。

- (4) 今年の平和宣言は、広く市民に共感してもらえよう、やさしい言葉を用い、見ても聞いても理解しやすい表現に努めるとともに、例えば原爆投下日時を具体的に盛り込むなど、若い世代への継承も意識して起草した。

2 宣言に盛り込んだ主な内容

- (1) 被爆者自身の「被爆体験や平和への思い」の共有

ア 被爆体験談

- (7) 当時 13 歳の男性が 8 月 5 日に、同級生と川で時間が経つのも忘れてたわむれ、泳いだ体験を基に、戦時中とはいえ、広島市民はいつも通りに生活していたことを伝える。

- (1) 当時 16 歳の女性が 8 月 6 日に、被爆により皮膚が焼けただけ、必死の思いで避難する道中、泣き叫ぶ子供を助けることができなかった体験を基に、一発の原子爆弾がもたらした広島島の惨状を伝える。

イ 次世代や世界に伝えていく決意

- (7) 被爆者は、平均年齢 77 歳を超えながらも、今もって力を振り絞り核兵器廃絶と世界恒久平和を希求し続けていることに言及する。

- (1) 今こそ私たちが、すべての被爆者からその体験や平和への思いをしっかりと学び、次世代、そして世界に伝えていく決意を述べる。

(2) 核兵器廃絶に向けた訴え

- ア 世界の都市が 2020 年までの核兵器廃絶を目指すよう、平和市長会議の輪を広げる決意を述べる。
- イ 各国、とりわけ臨界前核実験などを繰り返す米国を含め核保有国に対して、核兵器廃絶に向けた取組を強力に進めるよう訴える。
- ウ 核不拡散体制を議論する国際会議の広島開催を目指すことを表明する。

(3) 東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所の事故の言及

- ア 震災は、66 年前の広島を彷彿させ、とても心を痛めていることを伝え、亡くなられた方の冥福を祈る。広島は、被災地の復興を願い、被災者を応援していることを伝える。
- イ 原子力発電に対する国民の信頼が失われたことを指摘し、「核と人類は共存できない」との思いから脱原発を主張する人々、あるいは、原子力管理の一層の厳格化とともに、再生可能エネルギーの活用を訴える人々がいることに言及する。
- ウ 日本政府に対し、国民の理解と信頼を得られるよう早急にエネルギー政策を見直し、具体的な対応策を講じるべきと訴える。

(4) 被爆者援護施策充実の訴え

被爆者の高齢化が進んでいることを指摘し、「黒い雨降雨地域」の早期拡大と、国内外を問わずきめ細かく温かい援護策の充実を訴える。

(5) 原爆犠牲者への哀悼の意と平和への誓い

原爆犠牲者の御霊に哀悼の誠を捧げるとともに、核兵器が二度と使用されることのないよう思いを新たに、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現を誓う。

3 宣言文

別紙のとおり。(8月6日平和宣言開始後解禁)

(参考資料 1)

被爆体験談選定委員会の開催結果

(参考資料 2)

被爆体験談を書かれた方(2名)のコメント